



身毛錄
坤

1 曾 5
326
2 止



門 1 曾 5
號 926
卷 2



○發之挑^て業^ご成^り意^いもか^はせ^しの^こも^も
^をと^り死^しら^るり^り又^又發^の中^の風^の也^也
^者も^も小^の水^の也^也と^と發^の毛^の也^也と^とい^ふ
^先の^の年^の日^の乃^の有^の持^のき^のま^のい^のも^の夜^の
湯^とは^はひ^ひ發^とあ^らる^る地^の地^の也^也
人^乃は^はま^まあ^あら^らる^る風^のの^の也^也
者^者あ^あら^らる^る新^のも^も衣^の類^の小^の石^の香^の也^也
^此も^も蠶^のの^のぬ^の人^のあ^あら^らる^る世^の俗^の也^也

明治三十五年
九月六日
書

いふ長病の人をさらすまらきくみおく
るはしき人らしくと死といふも言冷
るなり

○大まかなる蛇蛇とくく麻と香なり
し花葉婦人すすく蛇と捕らるる
花とかなししとくく結き夜とほ
くともよ海と持くく山へ蛇蛇是と見
くといふまきの花とかなししとくく女乃

極る赤き少蛇とくくくのくくく
男うまきいとせはまのくくく人
女少蛇とくくく彼な少くくく
結しとくくくくくくくくくく
かゝり物ゆり打るくくくくくく
蛇乃膽とくくくくくくくくく
やそくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

膽を海に落さるる膽、身に入ると後よ
と蛇の起ぬ所を危むと申す。あ
らうとてを信ずる膽を蛇に食はるる
蛇を食はるる所は蛇の起る所にあらず
小蛇は腹を食はるる先を食はるる
刀をすのめとて身に入ると世に膽は夜
あじうとて食はるる所は蛇の起る所
とて申す。蛇の起る所を危むと申す。地盤といふ

物と人とは非とも一粒のちりも
そとに百粒とて世に命を別する
といふ功徳ありと申す。胆の性甚く
うらやまの陽道とて養ふとて子、世に危
あやうしり詭に沈思考といふ大朝
延あやうとて世に危し人世に胆は
煙を食はるる養ふとて胆を食はるる
とて申す。命を別する所は子

のたもいふるたかひのふりかたより三十
年ほどは始りしころからけりし是れ
彼擔乃葉字のたもいふりしは
かの蛭蛇うづまと名なる者のまゝは蛭蛇
藤とうといふ名なりしなり

○松の本と拙りしけの長くうらぬ根よ
しきくちやし見れば根のまじりぬと
まよふらもなす年々ぬ内よ根よ

てゆせうり也し松の本のまじりぬ
所とすしひよのひぬゆり枝は方
と久しきし地とす也

○糸と拙りし河原よ一亩ほどは
しりあきもよきしはくちりむじり
るもまのよと名ぬゆりしは
高し乃南とも枝と名ぬりしは
拙りし俗よ月十日と竹しん研けんは

此日種一と云ふとまの事ふあ〜と正月元
日二月三日四月五日六月七月八月九月十月
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日
十一月十二月三日五日七日九月十月十日

幸ふ〜とけと豊新の比と種〜
去の池洞ひてる角の志あつと多きあり
○竹も城向乃と地ま〜あるより、齊地
ふま〜る舟ま〜る、若らよあのは〜し
そる竹の性あ〜切らよと合を〜
又梅葉の影も人乃と〜と書〜と書ひ
育て〜るより、山中よあのは〜し
若〜年爰日月風霜の事よ〜とら

坂下河場乃信家と云るも此の如く
すここのし極別よとく如く人目の目を
毛髪をよとてらへ入るは骨髄の入
骨活きあり

○此の如く庭より極むるより先は枯れ
岸の後九月の節よりまじりて地
凍くせば経一冊とて入る者
一見日中極くても其法う遠く

成長せぬといふ事うへ本末堅く
此の如く極むる事と云のこころ
言ふも恐むる事あり極むる事
士と貪欲をいふ事あり極むる
人の乱る事あり極むる事

○牡丹の花種類多き色も色黄なる
赤く白牡丹あり紫牡丹あり
赤乃紅なる少くも牡丹あり

是も苗芽とてしけと種の時よ秋雲の
水と根よかきし藍の文よ云く幸
妙なり又黄よせんこゆりぞ花子のあを
根よしけしもも黄よ花なり

○葉の巻れしひききうりし時蟻よき口
成封しと葉まの時さるる湯よ入るは
蟻のしけと花ひきき匂ひかきなり又
葉の花と種ありと三日漬置きしぬ出

よく洗ひて茶よ熱すまじく信りし
面白き物なりとさるる葉の根と食て
人と種と種しじと種なり

○花よとく香と表とよと好いとく秋乃
ぶく人よし花よとくと葉色よとく
長葉よ丹やととく目よらるるは
花よありとまらるる花葉よこしと幸百と
此壽命のうら何程あはれなる人乃

花を牡丹の才敵斗よあましく二階座
歌座あを除く邦の守のめ地をく
一圓上雲の錦とあまきい色月をまは
さ斗より人風雅の歌詩投壺のよ
しみ琴瑟乃そくひまき客の心斗よ
まよわし客世俗の礼よのし
教よ入く月をくつるに白昼よあま
たげをくも無とを横垣よ控ひ

て秘めし少端。小山池の死の梅の香
日あ海とあわさる年言老なる
人の家して菊の花をせし廣野あ大書
涙あすし麻脚無毛纏色とまし花乃
ませきいあはひの腰を記さしよ言不
うく法ひし海左右を道人せえ一幅
乃鳥のやくと中流浦をたてくはら
あまの河無あまきまより小すあ回廊

入野山約登少野のまじり名は旅と考也
 活梅櫻子の名花の菊とつひもそ中よ
 打中しり名画名笔古き昔物齊繪
 畫物被蓋ううふふ重さう酒の法政
 そそど信りの斬るころうさうとじし陶
 瀾の葉と東籠の下にりり徳治うて
 南山と名をせけうしちりけあり世二
 け牡丹見菊見生涯ふ花見乃極楽世界
 浮ふがひ世れも夏うけうさうさう
 也

○ 寸草生てふ現花ありて色よき場所よ
 草々々々き場所ありて色よき現花よ
 草々々々地すい河那少きも心あり
 ろきれよ草々々々んちもへりて
 久紀友をありてされも名花
 繁うても或は裏屋百姓家在所乃

勢よく晴地とれらるるといふ處ももみすすの海
しく長句のあつたきよとて天の目
暗夜なほの河をよこしひしきま
の雁とく或を海世ののいそごとくみよ
愁多く病字ありあつていかに
海もも言位の鷹もさしあかしの我
ゆ若田合藝者俗人の歌いよきなり
遊も給しえ花入る情もそくもよき

友ありそやりに病き京地とて花は
時をもちうとく何の事もなく樂まん
幸一年乃内祿いづくも及まじ地物共
すと人魔乃世といひの河をよき
ちよのいそ昔栄の父のまきいそ人
し十歳より百九歳まで二十箇年のら
花入とせぬものなるそとて世人
誠よを運ぶるいはる世のまき

○ 菊の葉よりしそく 麩類と並し 食せし
は味なりしと云ふ 枸杞湯よすといふ

○ 石河の花と咲きしと云ふ 深く光と輝き
海に出入りたりし中よすといふ 楢
よりしと並きし 九月 霜降の節よりし 線
各よすといふ 漢書 二月乃中 長命乃花よ
しといふと云ふ

○ 薺は吸物よ人の氣のうつらぬに 必食しと云
吐血しと云ふ 死するなりと云ふ

○ 薺よかりしと云ふ 物らみなりしと云ふ 食しと云ふ
張椿ちやんといふ 此はくさしと云ふ 細きと云ふ 大ききと云ふ
もといふ 油しと云ふ 並し 自命の給料よせしと云ふ 武
切命よす時 命をたらしと云ふ 命をたらしと云ふ 若
し 病病よす 命をたらしと云ふ 命をたらしと云ふ
人の命のよすしと云ふ 命をたらしと云ふ 命をたらしと云ふ
命をたらしと云ふ 命をたらしと云ふ 命をたらしと云ふ

○ してのいりていし、毒まじりの蛇心
ふらふらゆり、毒も又、毒の象より、
なり、毒も、先と、毒と、毒と、
醫者乃、各、殿より、名を、取ら、毒と、
く、是と、毒と、針と、毒と、毒と、
さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
と、割と、毒と、毒と、毒と、
○ 槐の花乃、黄ら、は、は、は、は、
は、は、は、は、は、は、は、は、

者乃、い、が、は、批、把、の、言、は、黄、ら、は、
毒と、醫者、い、さ、さ、さ、さ、
○ 麒麟、竭、とい、は、は、血、を、取、ら、は、一、名、と、
は、南、唐、國、より、出、又、廣、東、の、血、と、
の、言、は、教、丈、業、と、も、は、は、は、は、
か、何、り、さ、さ、乃、脂、液、と、は、は、は、
胎、の、根、を、さ、さ、さ、さ、は、は、
は、は、は、は、は、は、は、は、は、

令膳乃血とて正母の血濁と試るは
指のうしろにぬるる此の上は血とて
とて是は葉錫樹といふ木の皮よりとる也
● 葉豆とは中ふくく文豆といふ江戸を
八重のうしろに中ふくくはちとて
津湯の中へ入ると春河を文書く自ひも
味も新茶ふくく又柳の新芽を
茶の代りよ香くはちとて花乃よ紀

自ひあゝといふも湯ふくく香く
色

○ 酒をがらりとをけやまひと養ひ
怒り彼と葉とささく物る也とて
乃、用かき物よあゝと酒とて
古く出るとかかして身とて人酒と香
まぬ河と梅別入とて地とて
海とてなとてあゝとて

河をさつりてりてまらるる事成
物も是なること云紫乃いひ換く如く
法とやそのまらるる事いひ
○酒を味のうまき見とすも 昔くも
— 其さ下とす也

○黄多くと食しは娘姑の心やじ 黄魚と食
し 鰯の心は海中心 鰯 鰯 食とせし
飢る中へ 蘇除とくも 酒よとす也

鯖魚とくも 担き流さし 魚と食せ
せし 癡やじ

○人の口腹びり 位きよく ぼよか
くも ありて ありて ありて ありて
河を味とすも ありて ありて ありて
之 一旦 ありて ありて ありて ありて
いし ありて ありて ありて ありて
好味とすも ありて ありて ありて ありて

はもとくろぬらしむ程の清放供ふら
たぐらぬちかき天世の生世は
きはあつとも都へ伝氣家のまじり
三田藏のはら合味とあつみじり
わらふふ記ふらつ酒の砂
糖ふらあつらつのもまへ脾胃と
そつ病身へのふらま多しまふ
引く片田合の小思と席もつらみ福ふ

れよふらつら麦稗の兼食とふ十歳
つよまふ酒とわら味とぬ者却て
心身まま何の病若も好まふ
つよ色合非人の子生出らつら
交肌と志のき一日一文の酒終つ物と腹と
好らつらつら幸ふ富を修らあつ
と物く貧賤の境界とあつらつて
身の限もあつらつら物あつらつら

向し紀あるはしむるせよして急にかきひ
なくともきまき可らんともいへり身とあ
らじとのらじらる

○荔枝のそよよと性熱く陰の不足と
し補ふ陰症のそよの并家病何ん入
此荔枝のそよよとせら湯ふ煎し
利もまじ汗く出さくみぬるゆも
荔枝の症やよ薬より又渴とこあ

骨をせりうひ智熱と申す赤心
不寐健忘うしあそし龍眼肉の切
能もたよ同

○大穀ふあらしとくを代りの糧する
き物と芋薯蓣甘藷也

○長生不死の系仙人よもとく
しる松の実柏の葉桂道又加皮
茯苓石菖の根地黄白朮みゆ

遠志 天門冬 槐あんよの實 松の葉 松脂やぶ
是らのうちら共へ煉りて平日食へて長
生せしむる也

○ 檳榔子びんろうの積つみの塊かたまりと消けとを水みづの
徳とくのし碎くだとすもふあしむふあそ
く碎くだしむうえれとすもあしむあひ
てうれしむ

○ 黄糖わうとうといふ菓くだの餅もちと食たふ所ところと月つき糖とう
くろなる色の餅もちと虚うつろ空うつろと死しと危あやし

○ 藍あいの汁じゅうをい嚏ひきて是こゝ液えきとす者ものよ吾われ
しむとすも生なまゆの支しのさるさると瘰癧れんげん病びょう
傷寒しょうかんの類るいと治なしと治なくくの虫むし液えきと治なす

○ 蜘蛛くもとすも又また毒どくふあしむるも
藍あいの汁じゅうよ麝香じやくかうと加くわへ又また雄黄ゆうわうと加くわへ
用もちひとすも平へい愈いよと

○ 眼痛がんどうとすも三稜さんりやうと眼がんと治なす

○痰少く喘息つよきよは天花粉青黛の二味少く治する事妙なり

○喉閉の業は山豆根一味少く治す

○人面瘡ハ貝母少く愈む

○大人冬の正氣と云ふんし心く蘆頭乃

あさうふ横箱何れを用也

○豆と三年合して人の身おりのるく歩

約しこし燕と合すとあずは入れど

龍は春より冬養とくふる人たよかすも

まはるを糖いせしこしこしきうりしと石粉食

ハ並しと業もきこし蓮の実と蜜と紙一

両ふくた年商のかりりふる川草紙たよ

のちど梅は死するを何れ銀杏とくも

用し根をよ合ひしとそらら中ら目と

まはし半日とくし漸息候しるを

いふ事あはしはし心危し此の花から

そる今ハ大坂の志保の津よりのもはる
を糸のま乃再よ今ハ河の池と成ぎ
らじ海

○硯を青州そのふまより出る石と弟豆次
紅の糸の紋からのおまき物も紅線硯といふ
ま端州より出る紫黒とくく水と
あつ川きと端溪硯も端硯といふ
硯の上糸より書色乃は水と倍由よ今

乃續あり

○黄玉硯といふをまじくする紫の如く
○端硯のおくから形大くハ硯乃海細くせ
いすすちのこく書と海なる左
まどあは是ハ字と重なるり折
眼のまも何と眼と端硯の月利す
ハ字も眼のまも端硯も泡あり
也く眼ハ活眼死眼のこあり

○銅雀臺瓦の破るるは珍らしきありき
るもあはれやく乾く志し書にすれど
物なり又澄泥硯とて梅地の硯とて
角或は六角のりもあり少らふ花鳥とて
ころころ何ぞ

○硯の硯硯の硯浪の硯湯の硯貝乃硯と
毛何ぞ

○書の本じりし漢書と書しし又書し
るありしありしつありし書ししけり
用ひらるる本もあはれ書しし文字も書し
かく、油煙のそつらそと製らるる
○扉といふは今の圍屏のりしとてじりし
鳥の羽とてけりしるあはれ文字も戸の
り羽といふ字とて流るるけりし
らしし初まりしとて今も又今も
と摺扇とて墨扇といふあり

○鏡は秦の代の後よりらゝ紀元は
漢の代よりらゝ海言の形蒲陶らゝ代
隋と唐の代より後のははらみたき也
又二角後よりらゝ夢の氣と化らゝ也と
後と魔と除大災と防く也一又人の
死よりらゝ推よせらゝぬ前よ邪言
此のやゝに障得のなきはよそと亡者
の例よ後と並きはのよ推中よ納欠

葬る故よ古塚より古鏡の世も多し

○火齊鏡（火）といふは闇夜よ物を見せし鏡の如し

或は人乃み鏡をえらゝ後又妖怪のえも後

一問より火しといふ後十里二十里を

るかゝるまゝ上面の音はたの鏡よと裏よ

て人の影さるゆよとある鏡も也

○毎朝も指し髪とすく所と髪とから髪を

去り髪の所やとらゝ壽命の業をれとせ

表に家少くは松の吳名と木園丹といふ
園と松のた丹を他人乃業なり

○并に女子のむらり斗にありは男子もこれ
既よことゆなり

○びり漢の文より身向ははしむる役人
りまことやしらむつもいふ晋代は
も男子の容貌とする者いふ物とくも
は用ひしなり

○頬紅頬紅のまよとびり、的的のしりて天子徳侯の
はけいひ女中好まき、お森りとははし
ふ順あつしを月よ月の像、ある女はと、
ふしるるさうし地をそ女は紅ふらふと
紅紅のまよとびり、のまよとびり、のまよとびり、
床あとのまよとびり、弓射る者乃的的を同高
ふまのまよとびり、をほとお方の頬紅と
さしと糖糖ひらるとまよとびり

○其の位階と礼儀の法は、（一）のむと重き
官職の人のあはしむべきこと、（二）のむと重き
殿上とむと重き成許は、（三）の禮是儀の法は、（四）
のむと重きこと也

○是く唐洞乃昔物土は、（一）のむと重き
は、（二）のむと重きこと也、（三）のむと重きこと也、（四）
のむと重きこと也、（五）のむと重きこと也、（六）
のむと重きこと也、（七）のむと重きこと也、（八）
のむと重きこと也、（九）のむと重きこと也、（十）

うかしのむと重きこと也

○玉の黄のむと重きこと也、（一）のむと重きこと也、（二）
のむと重きこと也、（三）のむと重きこと也、（四）
のむと重きこと也、（五）のむと重きこと也、（六）
のむと重きこと也、（七）のむと重きこと也、（八）
のむと重きこと也、（九）のむと重きこと也、（十）
のむと重きこと也、（十一）のむと重きこと也、（十二）
のむと重きこと也、（十三）のむと重きこと也、（十四）
のむと重きこと也、（十五）のむと重きこと也、（十六）
のむと重きこと也、（十七）のむと重きこと也、（十八）
のむと重きこと也、（十九）のむと重きこと也、（二十）

○おと一糸の物もつらうと云せ又一人もく強
しつらひ鼓つらうと云せと云せ
らねきつらうと云せつらうと云せ
あつらひ鏡後と云せ凡ち世の心
具つらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ
○むつらうと云せつらうと云せ
是れ妙言の一人獲なる也

及んば貴きことや一知よと云せつらう
世よと云せつらうと云せ
痛つらうと云せつらうと云せ
肉もあつらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ
つらうと云せつらうと云せ

途の二たまきりふと地あきしりしき
まうろくし 莊子の齊物論の毛地
しよふせきしひ 彭祖の七百歳も七歳
東海の小火と同じき 八の葉の根も胡
せしとくたふくらむ 葍の影も同じき
うらとしひきききも 又の羽ふんきき人
情なきいふるなほしき 庄子のしひ
が書のはるけりけりしよ 地らきあはし

とまらむ 妙あねのき 葉ふとめいん
心の危を凡人のつらきし 秋の
あしよの雲とて地をてし 地をてし
始は生れ 痛のまきとくし
いまがし 一とふまらふんき
まらまら 障得とるしとくし
生老病死のまきとくし 終
んをまきとくし 道とらしとくし

世のしるしは、あつた今世の人にも天命と知
て、世の中世とびつらうとも貧穢困窮と
いふは、凡人といふ處きうも天命と安
んじうといふ者も、あつたうかたせ
ま、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ

○世道の人富貴利達よりしらぬものなり

○衣食事より、於海斗と、於るを、此
何しん、也、己、立、場、に、あ、つ、た、う、か、た、せ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ
あつたうかたせ、あつたうかたせ、あつたうかたせ

もまゝいかにしるるにあらざりし神律に
祈能ひたれ直にあらざりしにあらざりし父母
も孝なるも一見せしむるにあらざりし
肉體の恩恵にあらざりしにあらざりし
まはれを欲すもあらざりしにあらざりし
のうらたれもあらざりしにあらざりし
きりり

○ 婿體小全儀のまゝあらざりしにあらざりし支婦の
道とらうらうらと華道を小墓下の古処とせり
ふら父も乃恩懐とらうらと世帯書の手
をらひらうらと海もとらうらと多し
とらひらうらと親のからうらと
らうらとすの地の相のなうらと
○ つらふらと名もあらざりしにあらざりし
もあらざりしにあらざりしにあらざりし
とあらざりしにあらざりしにあらざりし

あまのこゝろをなほしつゝ又書籍の整理
せしむるにまこと心をこめて
しるすべし

○¹⁸⁷¹女子の教育
の料^{せいりょう}は女子の教育の
に必要なるものなり
書^{しよ}の整理は女子の教育の
に必要なるものなり
あまのこゝろをなほしつゝ又書籍の整理

今もあまのこゝろをなほしつゝ又書籍の整理
せしむるにまこと心をこめて
しるすべし
あまのこゝろをなほしつゝ又書籍の整理
せしむるにまこと心をこめて
しるすべし
あまのこゝろをなほしつゝ又書籍の整理
せしむるにまこと心をこめて
しるすべし

○即心即佛といふも其の旨を論ずれば
如しけり。いふ事なくも、仁徳の
らんとせし仁徳をばむく仁しくも
佛しくも、一同まめては、あはた
りたる仁の事として、まのり晋の代
入後世を神入人よきとせり。ゆ
家を可る、其の夫名よふ、いふ事
いふ事、いふ事、いふ事、佛より

いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、

○すも乃果報といふ、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
○廣大師乃伽藍建之の事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、

○ 秋也 老子 庄子 無の字より揚子
 太極といふ事にして高く 聖人をしてふいひ
 受しむるに無極也といふ事よと云ふ
 ○ 是より下世界の事 毎より一と云
 ことと云ふはありと云 地球を本無の中より
 生まるる事にして及つる事に入して一と
 地の位地よりあるの事 形ありて海ありて
 さらさら火ありてありてありてありてありて

薪なるれどもある物也 薪はくもは
 火をきかぬ燃れぬ火を薪ふあるはく云
 てもをたつる薪もなるもさら火をたつる云
 てもさくもなるも薪も受ても火の理を
 何と云ふも燃るも燃るも燃るも燃るも
 もお物よる物なり

○ 貧賤なる事より富貴なる事より世に
 存在乃云々なる事より富貴なる事より

あはれなる世にけりてはる河をり質
秋は好むきいれりて 朝夕夜歎念の
のめまよふ障りて書よふ書くは親を
も心よく書^すひて子も心よく書きて
ど何きよふのあはれなるは田畑
もお無^しく書^すひて山林もあはれなる
も拾魚とよふ山よ志^すく懐^くなる
雲よ田^をく^りて書^すひ物^ははるるなる

花よ吟^みて心あひる友何^も彼^もなり
釣^りて是^もよりも行^き肥^くなり子^もなり
藤の節よそじをけひけりては唐^の
よふりて静^かよふす申^するは世^のなり
るよふりて又^も何^もも書^すひて車^のなる
ゆら書^き林^のよふりてけりて拾^りて
可^しく物^はよふりて書^すひてはるる
海^の仙人^のの樂^みよふりて世^のの書^き花^のよふ

あつた

○人の言葉も文章もかく今こころの困
窮し落しき中よりたくみふり地へ
こころ貧窮困若くは小文才の上も小成
こころよあつた畢竟困窮をまじし言葉
車馬智義れ出入るいそいそとす
まじらふ地も怯むあつたのうけあつた
用もかく親類朋友の遠く

よのまねくもの地心のはりといひ
まもたつていそいでうきい田地家屋を
あつた地もあつたまもたつた地も
いそいそと地もあつた地もあつた
あつた地もあつた地もあつた地も
あつた地もあつた地もあつた地も
あつた地もあつた地もあつた地も
あつた地もあつた地もあつた地も
あつた地もあつた地もあつた地も
あつた地もあつた地もあつた地も

仍りてふふ感心ゆゑにたゞ聖人の平
獄獄ふ今も易徒と仰りあひ遊幸の爰
と遊あひてもんと安んずるは
ひの凡人凡人一例の痛ふあはむ

○風雅ふ仍りて百篇宮下りてふふ
のしと海ふゆふかふも中らるる松乃
あまふくのびる竹のまきさふく乃
るまふしつとさうもさふふあはむ

書物も漢山小法くあもふくもあはむ
くふもい香とて記ふ記ふとあはむ
同き友を記ふは記ふとあはむ
わくひたうり夜食の世法もあはむ
少と記ふも時作のあはむ
のしと登形のあはむ
あはむとあはむのしとあはむ
あはむとあはむのしとあはむ

○風物もよくなるにまはるるもあはれなる
 めりたのもせす書物もよくなるにまはるる
 ともなるにまはるるのまはるる
 芭蕉の風よくなるにまはるる
 てあはるるにまはるるにまはるる
 ぬき色喜もせよもせにまはるる

○まはるるにまはるるにまはるるにまはるる
 まはるるにまはるるにまはるるにまはるる

人の心からよくなるにまはるるにまはるる
 若くまはるるにまはるるにまはるる
 月人の巻よくなるにまはるるにまはるる
 又まはるるにまはるるにまはるるにまはるる
 まはるるにまはるるにまはるるにまはるる
 進歩の心よくなるにまはるるにまはるる
 まはるるにまはるるにまはるるにまはるる
 まの心よくなるにまはるるにまはるる

○ 少年の如く此の如く物もなほくはひきかたも
のれとすよきして却てあつりり見事
ありて又この海帯もさうも樂まぬ
死も月もそれるはもの程もさうも

○ 是もさうはわよえ高ぬ書物と見今も
約ぬ平水の後事ありあひるの世よも
るの世のよも今も瑞もいふ味も
さるるもく格別のもりも好も

○ 小書書

○ 士官此人は十歳少く人の事いふは
み十歳少く陽名とれは再も目も
おしりては骨をもすくやうも
中もよけひ書物と在る海も
ふらぬ長業よ月もさうも
り月もさうも今も士官
世もさうも

事後 功高ふ身を今年のもよほひ
徳心をくむるも立身出世といひ
今中その知約格式取ふとぬれぬもの
かせ起てしは休長の徳も一日も樂なる
まうくかきあひの男女のちよき事成るま
衣食住の套といひまうく子孫の栄花を
てらふはうらうら白樂をとりひる官爵は
他人の福よとるしをむるも立身ありし

○ 乞ふ車は上よは孔子の業なるまうくし
くも船のゆよ佐美とせぬししは流ハ天
道ししはしこのちまうくしはしひるるま
孔子の家内よとらるしはしはしはしはし
しはしはしはしはしはしはしはしはし
るたはしはしはしはしはしはしはしはし
平日のちしはしはしはしはしはしはし
そしはしはしはしはしはしはしはしはし

高均たかひらとりの聖人あり是の聖人の物也
普通ふつう乃海ふ河も也

○孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり
孔子の全集と推してはけり

後とらしき質しつとすらしき物
是世界一統乃中よひなり

○中庸といふ素其位而行そのじつと、路と自分
お徳のさしはけり
中庸といふ素其位而行と、路と自分
お徳のさしはけり
中庸といふ素其位而行と、路と自分
お徳のさしはけり
中庸といふ素其位而行と、路と自分
お徳のさしはけり
中庸といふ素其位而行と、路と自分
お徳のさしはけり
中庸といふ素其位而行と、路と自分

その指の志は或者少くは先と構ひぬ者
 ありと違はらざる識の解あり命乃
 長きと短きもなるものも同じ
 幸と不幸もなるものも同じ人の命の
 事なるものも命の命なるものも幸と
 不幸の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも

是はくも命の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも

○孔子の疾ふ人よニ命の死ぬる事ありや
 天命より命あり人なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも
 命の命なるものも命の命なるものも

物にせしむるは人の心を治むるに似たり
世に治むるは世に治むるに似たり
世に治むるは世に治むるに似たり
世に治むるは世に治むるに似たり
世に治むるは世に治むるに似たり
世に治むるは世に治むるに似たり

○易の内より納約自牖との語は又と導く
たは易の内より納約自牖との語は又と導く

易の内より納約自牖との語は又と導く
易の内より納約自牖との語は又と導く
易の内より納約自牖との語は又と導く
易の内より納約自牖との語は又と導く
易の内より納約自牖との語は又と導く
易の内より納約自牖との語は又と導く

疎云のしせしむるに人なるもの
半よはしむるはひらちた年筆の
河らあるものおかんにせしむる
と記しむるは心腹の事なり
少人しむるは心腹の事なり
あまたしむるは心腹の事なり

○今世乃勅使の者いふや天子の方には
志ありしは教の事なり執行職并上級の人

少くもまゝの用いしむる者なり
さしむるは大家の人の事なり
の事なり人より痛恨を興ふる事
竊にらむるは心腹の事なり

○冠業公といふ人を中より人々を推挙
さしむるは今世の仕へる例なり
其例の事先まことの例なり
るもの人より事候なり老中の名目

〜〜〜
〜
〜

○人の才のさしき機轉きまといふのは字文際
のゆゑもあつたやうな事だといふ
景やまのさしきといふ事は、彼等がさしき
事といふ事といふ事といふ事といふ事
といふ事といふ事といふ事といふ事
といふ事といふ事といふ事といふ事
といふ事といふ事といふ事といふ事

○世に後〜といふは、地味すの事だといふ事
を海から向よりの事だといふ事
といふ事といふ事といふ事といふ事

○世に〜といふ事だといふ事
弟が〜といふ事だといふ事
何事も性さが色いろあつたといふ事
〜

○朋友ともの交まじりい人倫じんのさしき大切なる事だ

○ ちやうど 丹波 ありやいふまゝのにおひ
をいふありて在らるる ちやうど 友のきく
しきなるものから 元来 友をきくまぬ
ありてその風をきく 命なる人なるもの
ありてその十年ありてその里のちやうど
ありてその命なるもの命なる人なるもの
友なるもの 一知己なるもの ちやうど
ありてその命なるもの

○ ちやうど 張公 藝のり人なる 九代が
間乃 親類 同族 ちやうど 中なるもの
ちやうど 帝なるもの ちやうど 命なるもの
ありてその命なるもの ちやうど 命なるもの
ちやうど 命なるもの 又 浦江乃 鄭氏のり
人なる 命なるもの ちやうど 命なるもの
眼乃 大祖 皇帝なるもの ちやうど 命なるもの
ありてその命なるもの ちやうど 命なるもの

と申用ひぬあるにやとせしむ

○男の後命を成りて貧乏人となすに
せむしと申す馬の皮の骨のつら
む女の後命を親類縁者とせしむ
と申す神仏の刺せしむ
きと申すも難及周筋の時よ
ては控費の人を平すしむ
今あきも大病の神をけしむ

幸ひ

○殺せしむとせぬといふに
浮の果報と申す
山林溪川よありしむ
息を歎の歌と廻板のよ
りてんまに仁慈の人
今此情の多よ
と申す

○人の女知量ありとも可なり
○神系振舞の類と勿論の事入る神前
○穀生とせぬ身の新穡もさうも
○あつと

○陰徳あまの陽報ありとも可なり
○人乃りまする事一後のこと
○てまの徳を徳とてあつと人の
○系一陰徳とてあつと再の徳
○しる人あつと家ひつと
○あつと也のこつとす
○徳のあつと

後世に傳へしむるに可き事なり

○此の書は、今日もあはれむべき事なり
一 何とあはれむべき事なり
中、心もあはれむべき事なり
事、あはれむべき事なり
あはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり

○新編の書は、今日もあはれむべき事なり
一 何とあはれむべき事なり
中、心もあはれむべき事なり
事、あはれむべき事なり
あはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり
今日もあはれむべき事なり

同く執事とありて、
其殺しとれし事少所
し多しとも是に富む
んあるも同くさうなり

○申すの事今更し
此名及らざる事
可記しし事
の御りて教ふ事

身と物の性質
依りて人の心
あるも人々の
分交し用たり
申すも用たり
此の御事

○天下の事

○ 夫はたゞの世に於ては、
人々の心を安んずるに
食物よりたゞの母ニテ
養ふ所あり平日乃
飲食八九分を以て
心身保嬰論とて小
思科の書とす
るは、
十乃正三分の海
に、
しるし

○ 夫は大人をかく
○ 貧乏を吝嗇と
世の志を以て
いふは、
あま今世よ
そしつたの
を

○ 氏百姓よ

元より云々しては、高徳を福と取
と破りて、衣類と名廉食の三つを
人きよむる見識の事、此等より人をして
是も、じやうやうな事、かゝる者、
さほ、物を、利欲と貪る人、ふか
○人乃、生を、つぎ、よ、中、下、の、三、つ、あ、る、は、中、を、
の人と、あ、よ、う、は、者、よ、う、つ、ま、し、く、あ
くも、なる、也、と、よ、地、上、の、人、と、あ、き、な、り

い、く、も、也、と、あ、き、な、れ、人、と、よ、地、上、よ、入
ま、う、一、孔子、の、道、よ、上、智、と、下、愚、は、う、ら
は、し、い、ま、ま、る、る、心、の、廉、潔、せいなる、人、と、夫、下
も、人、の、懐、る、欲、も、き、人、と、一、文、一、言、の、事、と
あ、ら、う、心、廣、き、者、は、大、海、の、も、と、ま、た、は、た、は
き、り、の、み、粒、一、つ、も、ま、う、く、も、智、者、の、
天地、も、も、じ、う、ま、ま、う、り、お、も、よ、愚、者、と
又、穀、六、畜、い、く、も、も、志、は、忠、臣、の、谷、い、り、れ

仕直よあやむくしむくぬも悔人よ人よ
危はらひて薫くあ門前の掃除は
その籠子むくく世名しむく人を
それ荒穢くすくく後よのく何代
の大名達も道くすくすくすのく柴
くくく

○女子つと佐のき名つととくくく水も流盗り
あひあくのぬぬぬぬくくくくくくくく

涙も大海くくくくくくくくくく
欲く欲くくくくくくくくくくく
ききよあくくくくくくくくくく
名のくくくくくくくくくくくく
ふもきよくくくくくくくくくく
ふも名くくあがはくくくくくくく
けくくくくくくくくくくくくく
のき名くくくくくくくくくくく

○ 耳の形と鼻の下は人中といふ
可のつらさすあるものも百歳の壽命
ありといふも作らば例も古きを家
東方朝大よわくひたれも不敬なりとて
後人より東方朝冠をぬくと政を
たげしうし上の物といふまじは
らきうし只彭祖乃西は長きなり死
ある歎ひしうといふ武帝をいふれと

同じく東方朝の首は彭祖は八百歳に
至す乃作のふくは彭祖の人仲長史は
すあるも鼻の下はすある種もも
面の長さのまじも作らば長きなり
し

○ 古物といふも昔ありし物も時代乃
地もすうも世もすも買並たり
或日破じしるも物あるなりしは是

もろもろ田畑もなごうとて流るるをのら
世調ふる三景をうらへこれもさうか
そのかきさまいさもど彼れみだし
海をみよもしひを主のはとりのき舞の
挽ともよさしとくなくも食ともな
ちやた乃とぬるるを公使に九府といふ
お倉乃心の錢ありふ一文何なるいふこと
とせしとるや

○東坡に佛印禪師といふ安くまじりしが
東坡をいふまこと仏印といふ古人の詩
と見えよ時聞啄木鳥疑是打門僧
まこお乃詩り鳥宿池中樹僧敲
月下門をゆるりこころよ古人も出家
多敷と對ふとて詩り佛のまじりて
今見まうとて人され多きはをいさ
佛印禪師といふこと今日もそえに

文を借對能いこととていふまじやし言らま
らるしとて

○東坡軍旅は日秦少游と一決海盛せ
し河東坡やと風とて女さうとて一
是と身の垢あからさくせむる物入
こつと秦少游と友あはれとて是は
いそとら申すことらふ入いひ書きて
訳はとての約と佛印禪師よとて

とらとて一申すことら又とて
とてと約束一秦少游とを和の
びとて佛印の方と約きとて
とてとて一はとてとて東坡の
とてとて一とてとてとてとて
とてとて一とてとてとてとて
とてとて一とてとてとてとて
とてとて一とてとてとてとて
とてとて一とてとてとてとて
とてとて一とてとてとてとて

酒をくむ秋東破り新く今夜秦少
游と云旅くのかげを致しる中の一
可ふ新くする時刻とありて何れも出
る物と作しきくも人我緒と云
和者(の)少くは冷麦と云ふ中一
しと酒を飲りて佛平語合たり
翌日又成りて東坡秦少游有人は是
れとく仏平のこゝ新く明く其刻の筆ひ

何と勝願と云ふけり多しと云ふは
佛印と云ふも其氣といふ物ありて
身中一と云ふは其物と云ふは
先ら約束なり冷麦と云ふは酒と
しと云ふありて是れも人共笑して
席をもちりてありて其物と云ふ
は

○支那中心の事

ゆりけし書乃大と吹そ花と紙と
詩をゆりそ書は吹火朱唇動添薪
玉腕斜遥看烟裏面大似霧中花
とけつとけりそ儻とそまゆ香一の若
何りそ女房身色のゆりそ約そ隣
まゆ乃中まきうららぶとく又大と焚
そ花とゆりそゆりそゆりそゆりそ
何のそまゆゆりそゆりそゆりそゆり

たも詩とそいひはゆりそゆりそゆり
いひきとそゆりそゆりそゆりそゆり
大と吹そ花と紙とゆりそゆり
ゆりそ女房かゆりそゆりそゆり
ゆりそゆりゆりゆりゆりゆりゆり
首とゆり吹火青唇動添薪黒腕
斜遥看炬裏面恰似鳩盤茶

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be ligatures or abbreviations. The overall appearance is that of a well-used, possibly legal or administrative, document from a past era.

